

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.17 タコの滑り台

タコの滑り台（鉄筋コンクリート製）は、年々その姿を消しつつある公園遊具である。写真は「タコ星人ロケット」と名付けられた新西新井公園（東京都足立区）のもの（図1）。同区には合計で11基のタコの滑り台があり、いわばタコの滑り台の「聖地」といった趣だ。タコの滑り台は公園遊具であると同時に、美術作品としての一面もあわせもつ。それがプレイ・スカルプチャー（遊戯彫刻）である。

プレイ・スカルプチャーは、デンマーク生まれの彫刻兼建築家のエゴン・モーラー・ニールセン(Egon Møller-Nielsen)が1950年代に考案したといわれ、その主眼は文字どおり「プレイ（遊び）」に置かれている。プレイ・スカルプチャーでは、子供は自分たちでルールを自由に生み出して、大人には考えつかないようなさまざまな遊び方を考案する。既製のブランコやシーソーなどではその遊び方が限定されるのに対し、プレイ・スカルプチャーは子供に遊び方を創造させるのだ。子供の創造力を育む彫刻作品、それがプレイ・スカルプチャーである。

しかし一口に彫刻作品といっても、プレイ・スカルプチャーは美術館で鑑賞される彫刻作品とは大きく異なる。美術館では作品に触れることは許されず、静かに鑑賞されることが求められる。これに対しプレイ・スカルプチャーは、作品にとって厳しい環境である野外に置かれ、子供は自由に登ったり滑ったりして、常に物理的な接触や摩擦を伴う。コンクリート工学者の中村伸は、「月世界のきのこのような変テコなオブジェに子供がはまりこんでいるのはまことにほほえましい」として、「触れる彫刻」としてのプレイ・スカルプチャーに積極的価値を見出している（『国際建築』第23巻第6号、1956年）。

新西新井公園のタコの滑り台は1965（昭和40）年の作で、一説では「日本で最初」のタコの滑り台ともいわれる。その考案者とされる彫刻家の工藤健（くどう・たけし）は、タコの滑り台の誕生の経緯を以下のように述懐する（筆者による工藤氏へのインタビュー、2019年）。当時の工藤は公園遊具の制作を手掛ける会社に所属し、「石の山」と題した遊具（スロープが交差する滑り台）を考案・設置した実績があった。工藤は足立区役所に「石の山」を提案したところ、担当者は「これでは何だかわからないので『石の山』に頭をくっつけてタコのような見栄えにしてはどうか」と進言、工藤が渋々ながらその提案を受け入れて作り直したのがタコの滑り台なのだという。工藤の予想に反してタコの滑り台は大ヒット、そのユーモラスな姿も相まって瞬く間に全国的へ拡散した。

多摩美術大学教授（2008年に定年退官）を務めた工藤は、海外ではユーゴスラビアセメント彫刻シンポジウムに招待されてモニュメントを制作し、国内では小野田セメント株式会社（当時）が協賛する野外彫刻展に数度にわたり出品した経験を持つ。工藤の妻で同じく

彫刻家の日高頼子も野外彫刻展に何度かセメント彫刻を出品した実績を有する。夫婦仲良くセメント彫刻を制作していた姿を想像すると、ほほえましい。

1950年初頭に北欧から日本に紹介されたプレイ・スカルプチャーは、日本で独自に発展、2000年代に入るとプレイ・スカルプチャー発祥とされる北欧に逆輸入されるに至った。2011（平成23）年、デンマークの首都のコペンハーゲンに建造されたタコの滑り台（縦6m×横10m）は、左官工事業の西谷工業（東京都中央区）と望月工業（東京都新宿区）から派遣された左官職人が現地作業員と制作したもの。日本のプレイ・スカルプチャーが海外進出を果たしたともいえる。

新西新井公園のタコの滑り台は進化を遂げている。筆者が最初に訪れた2018（平成30）年、その外観は茹でられたタコのように真っ赤であった（図2）。それから1年後に訪問した際には、図1のようにカラフルな装いに変化していた。「タコ星人ロケット」としてデビューしたのである。区民から募集した塗装デザインのうち、最優秀賞に輝いた作品デザインが採用され、従来の赤一色から塗り替えられて斬新なイメージに変貌した。タコの滑り台は区民の間にしっかりと根付いている。



図1 「タコ星人ロケット」（新西新井公園）



図2 「タコ星人ロケット」になる前のタコの滑り台（2018年撮影）